

訂正とおわび

本誌のバック・ナンバーにおいて、下記の個所に誤りがありました。おわびして訂正いたします。 <https://toragi.cqpub.co.jp/tabid/928/Default.aspx> (編集部)

■ 2021年5月号

● 特集 プロログ

p.20 右段↓1行目～12行目 文章差し替え：「PICマイコンの生い立ちは1970年代中ごろGeneral Instruments社が開発した「PIC1650」が起源とされています。これに続いて開発されたPIC16C5xシリーズはワンタイムPROM型か高価な紫外線消去型なので、一度プログラムを書き込んだら、2度目はないか、消去にしばらく待たなければならないというものでした。したがって、机上デバッグは相当慎重にしなければなりませんでした。

この後1994年に日本に最初に紹介されたのが、「PIC16C84」でした。電氣的に消去が可能だったため多く使われ始め、続いて1997年には書き換え回数が格段に増えたフラッシュ・メモリの「PIC16F84」が開発され、いずれも個人でも購入ができたことから一挙にユーザーが増えました。」

■ 2021年6月号

● 特集第5章

p.86 左段↑13行目：DFU内部のデータ→DFB内部のデータ

● 重点企画第1章

p.97 右段↓3行目：出力電圧が小さく過度の依存性が大きく→出力電圧が小さく、さらに温度の依存性、固体差も大きいので

● 一般記事 3桁表示ミリオーム計の設計・製作

p.128 図7(a)：電流源記号の近くに“10 mA”を追加

p.128 図7(b)：電流源記号の近くに“10 mA”を追加、抵抗 R_1 1 mΩに対してコメント追加“10 mAの電流が流れる”

p.129 図8(b)の U_2 74HC595の11番ピン：SREG_DCR→SREG_DCK

p.129 図8(b)の7セグメントLED：端子gの下に“dp”を追加

p.130 図8(c)の C_8 3.3 μF：回路記号が電解コンデンサになっているが、極性がないセラミック・コンデンサ

p.130 図8(c)の V_1 ：OM-3x1→UM-3x1

p.130 図8(d)の D_1 , D_7 ：HSM1245→HSM124S

p.130 図8(d)の $R_{17} \sim R_{19}$ ： R_{17} 100 kF → R_{17} 10 kF, R_{18} 100 kF → R_{18} 1 kF, R_{19} 100 kF → R_{19} 500 F

p.130 図8(d)の U_4 のコメント：CMOS 4052BE相当品 HC4052Bは±5 V対応品ならOK→CMOS 4052B相当品 HC4052は±5 V対応品ならOK

p.138 図19の D_1 ：HSM1245→HSM124S ※図8の訂正版をトランジスタ技術のwebページ[ダウンロード]→[2021年]→[TR2106M.zip]からダウンロードできます

● 連載 新人技術者のためのアナログ回路設計スタディ

p.176 左段↑16行目：開発されたが、図(a)に示す→開発されたが、同図(a)に示す

p.178 右段↓2行目：極端な例では図4の→極端な例では図5の

p.179 右段↑15行目：余った分は図6で→余った分は図7で

● 連載 FFTアナライザの科学計測応用

p.191 右段↓7行目の式：

$$\frac{\sin\left\{2\pi\left(\frac{2\pi n}{N}-1\right)\right\}}{2\pi\left(\frac{2\pi n}{N}-1\right)} \\ \downarrow \\ \frac{\sin\left\{2\pi\left(\frac{2n}{N}-1\right)\right\}}{2\pi\left(\frac{2n}{N}-1\right)}$$

p.195 図11 サブ・キャプション↑2行目：回転傾斜で、解析結果としてわかりにくい→回転傾斜は不揃い

● 連載 がんばれ、新人君!!

p.197 左段↑16行目：しきい値→閾値(以下同)